

## 知らないおじいさんからもらったガム

李 婷

主人と娘が東京に会いに来た時の話である。

ある日、家族3人で電車に乗って、東京の郊外へ遊びに行くことにした。もともとすいている路線の各停だからか、平日の昼だからか、電車はガラガラだった。乗客はみなうまい具合に他人とスペースを残して、ゆったりと座席にすわっていた。郊外へ行けば行くほど、車窓から広がる景色が綺麗になり、それを楽しみながら親子の会話を楽しんで、すっかり観光気分になっていた。

どこからか、80代くらいのおじいさんがやってきて、ポケットから何かを取り出しながら、「何もないけど、どうぞ」と言って、目の前に渡してくれた。私は反射的に「あ、ありがとうございます」と言って、軽くお辞儀しながら、目の前に渡された何かを両手で受け取った。受け取った後になって、自分でも不思議に思った。包装紙もきちんとしていて、LOTTEの字もはっきりしているガムだと目で確認でき、また本能的に主人に一つ渡した。すると、あのおじいさんは空いている席がいくらでもある電車の中で、なぜか私のすぐ隣に座り込んでしまった。

日本語の分からない主人に、小声で「认识（知り合い）？」と聞かれ、私は「不认识（知らない）」と答えた。また、驚きを抑え「别吃啊（口に入れるなよ）」と更なる小声で言われ、「没事（大丈夫）」と答えた後、手本を見せるかのようにガムを口に入れた。集中力を全部口の中に凝らしてみると、何も変な味はしなかった。驚きと疑いを隠して、冷静を装っているながらも、なんでガムをくれるんだろう、と心の中は無数のハテナが舞い上がっていた。文字にすると、やや長めに感じるが、実際は本当に一瞬の出来事だった。

「どちらへ？」と隣に座ったおじいさんが再び口を開き、気まずい沈黙を破った。最初は警戒心が捨てられず、聞かれたら答え、相槌は打つが自ら話題を出さない聞き手に徹していたが、いつの間にか会話が弾んでいることに気づいた。私達が中国から来たのだと聞いて、おじいさんは中国語の「ニーハオ」で主人と娘に挨拶したり、娘は中国から持ってきたおやつを自分のリュックから取り出して、おじいさんにあげたりもした。おじいさんが降りる駅に到着したので、「じゃあ、日本を楽しんでください」との言葉を残して電車を降り、ホームで手を振ってくれた。

ガムをもらってよかったなあと、まだ喜んでいる中、「妈妈，你不是说不要和陌生人说话吗？你还吃人家的东西。（ママ、知らない人と話すなって言ったじゃん。人様のものまで食べちゃって。）」と娘に指摘され、答えに詰まった。

本来、飴や果物などを誰かに渡すのは、好意を示すサインであり、話したい意思表示で

あり、交流のきっかけを作る極めて一般的なコミュニケーション行為である。しかし、こうした行為は、現代社会において、たとえ好意であっても不審に思われがちで、時には人に迷惑をかけ、人を困らせる行為にもなってしまう。都市化が進むに連れて人口密度が上昇し、人と人の物理的距離が限りなく近くなってきているが、人と人の心理的距離が限りなく遠くなってきて、心の砂漠化とも言われている。人々は他人の世界にも入ろうとせず、自分の世界にも入ってこられないように、目に見えない厚い壁を作って、黙々と自分のことをこなそうとしている。さらに、詐欺や誘拐などに脅かされて、人間不信が蔓延するのも当然のことのようになってきている。知らない人と話してはいけない、知らない人の物をもらってはいけない、知っている人の話も信じてはいけないなど、家族や自分自身を守るための信条となってしまう、次世帯へ押し付け、引き継がせていこうとする。

もともと、毒りんごを食べた白雪姫の童話でわかるように、どうも現代社会だけの問題でもなさそうだ。険しい世の中というのは、いつの時代だって、どこの国だって、変わったりはしないものかもしれない。とはいえ、いつまでも神経を尖らせ、心を閉じたまま人と接し、びくびくしながら毎日を送る必要もない。たまには、自分の心を開けてみたり、人の心の扉を叩いてみたりして、他人との関わりの中で、人生を楽しもう。

知らないおじいさんからガムを渡され、そしてそれを素直にもらったことがきっかけで、楽しい会話ができしたのは、私にとって初めての経験であり、今後2度も3度もあるとは考えにくい。なぜ私達のところにやってきたのか、なぜガムを渡してくれたのか、そして、なぜ迷いもせずそのガムをもらって、口に入れたのかなど、謎は未だに解けないままである。

謎は謎のままでいい。心の温まる思い出を作ってくれた名前も知らないおじいさんに、そして、その好意を素直に受け止めたその時の自分にも、感謝したいと思う。